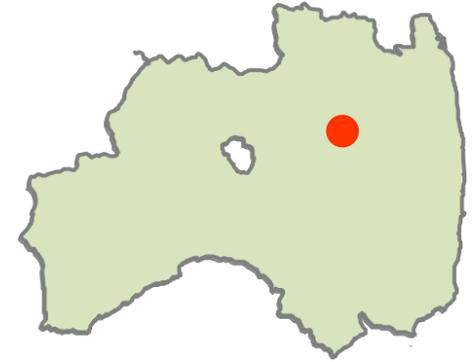


## 脱炭素時代の新しい農業と土地利用を実現する

## &lt;概要&gt;

- 事業実施主体：二本松営農ソーラー株式会社(福島県二本松市)  
(みやぎ生協・ゴチカン・ISEPの協働事業)
- 発電設備：営農型太陽光発電
- 発電出力：3901.6kW(DC) 1930.5kW(AC)
- 年間発電量：約3,710,700kWh
- 発電設備下部の農地：628.44a(ブドウ(シャインマスカット他)、大豆、小麦、エゴマ、牧草※ブドウ以外は有機栽培)
- 運転開始時期：令和3年9月



発電施設の全景

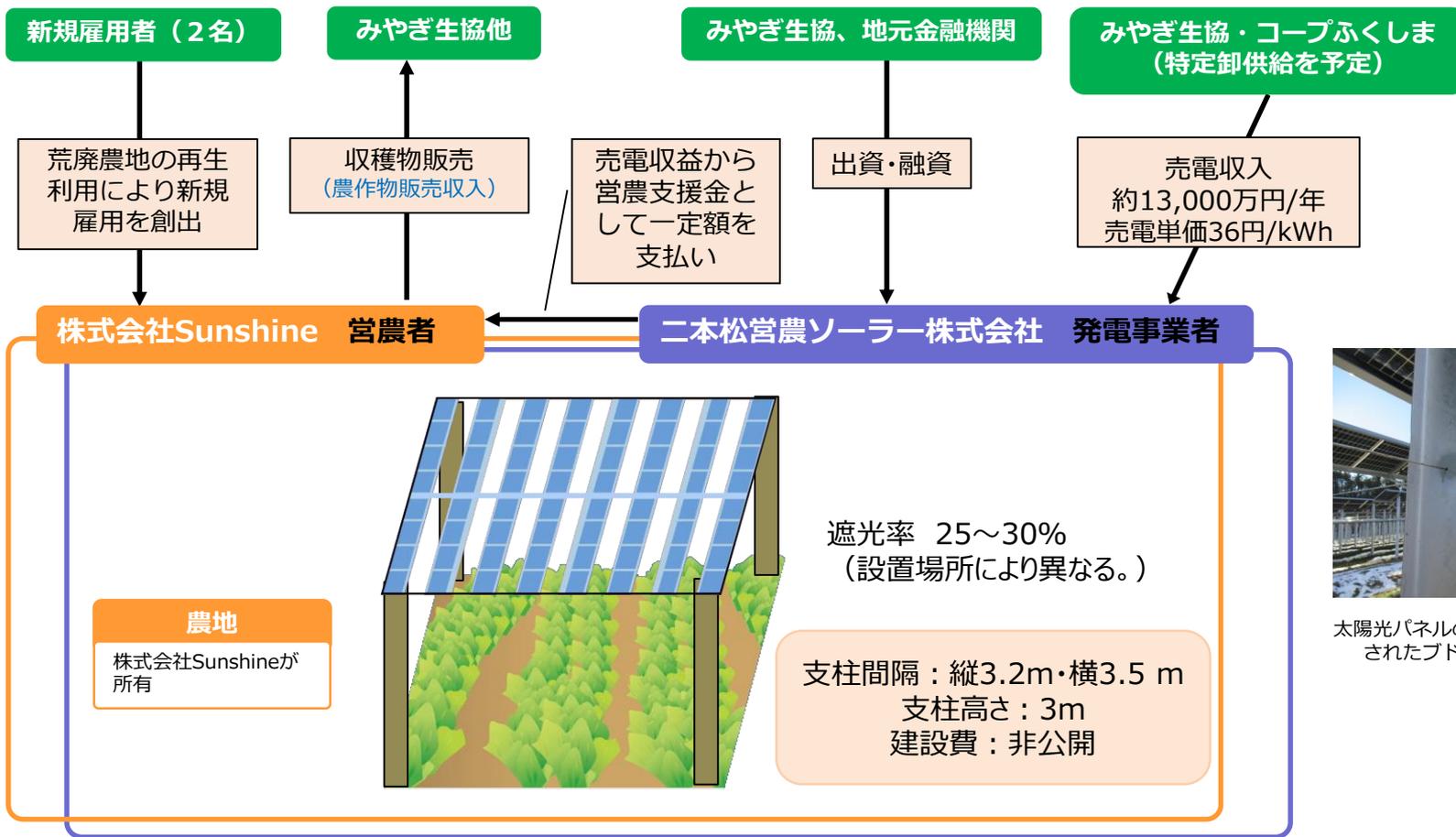
←



パネル下栽培中の作物

→

- 発電事業は、二本松営農ソーラー株式会社が実施。設備下での営農は農地所有適格法人株式会社 Sunshine（認定農業者）が実施。二本松営農ソーラー株式会社代表取締役の近藤恵氏は、株式会社 Sunshineの共同代表も務めている。
- 荒廃農地を再生利用し、農業生産とエネルギー（電気）生産が相乗効果となる新しい農業と土地利用の実現を目指している。
- 有機栽培により大豆やエゴマ等を栽培。ブドウは育成期間中であり、本格的に収穫できるようになる2024年頃にはブドウ狩りも予定している。
- 営農型太陽光発電事業は、一番大切なことは「安全性」次に「農業優先」三番目に「売電」という考え。



太陽光パネルの支柱を活用し、設置されたブドウ棚（鉄線部分）

- 発電設備下の作物の収量について、大豆は180kg/10a、エゴマは40kg/10a（小麦は生育中のためまだ実績なし。）だった。大豆は高温障害が回避されたとみられ、品質もよかった。エゴマについても良質だった。
- 建設時には農業機械で作業を行えるか、設計上だけでなく実際の支柱の位置を想定し、作業は行わないまでも空走（農機のターン等）を行うことが大切。
- 営農型太陽光発電の場合、発電設備のメンテナンスが大切になるが、営農を行いながら目視点検ができることがメリット。
- 売電収益について、露地栽培でもぶどうの着色が悪いという話を聞くので、LED照明を設置する等農業分野の新しい取組にも再投資することを考えている。